

伊藤外科ニュース



97号

2012.07 発行

夏の水分補給

東京も梅雨明けし、いよいよ本格的な夏になりますが、皆さんいかがお過ごしですか？

以前、私は梅雨の時期に足の裏が火照り不愉快でした。しかし、ここ数年はジョギングや速足歩きを行うようになり、不思議とこの悩みは解消しました。蒸し暑い時期ですが、適度な運動は健康のためにやはり必要ですね。勿論十分な水分補給をお忘れなく。

ところで、水分補給といえばよく「水やお茶の摂取がよいのか、スポーツドリンクが良いのか？」と質問されます。

暑い時期に塩が吹いたようなシャツで来院される元気な若い方や炎天下での現場仕事の方には、水分と同時に塩分の補給が必要でスポーツドリンクを勧めます。

しかし、腎臓の働きが低下した方や高齢者には、過剰な塩分摂取は不要です。スポーツドリンクだけではなくお茶やお水も併せて飲んで下さい。

高齢の方に熱中症が多い理由として、身体の水分貯蓄量の低下や渇きに対する感度の低下などが言われています。暑い夏には、ご自宅の中でもまめに水分補給をしてください。



発熱の種類

さて、今回は発熱を伴う病気についてお話しします。

町医者は発熱を主訴に来院される患者さんと先ず接する医療機関です。初診時に発熱の原因がわかる病気ばかりでなく、しばしば診断がつかなく往生することがあります。発熱イコール細菌感染症ではなく様々な病気を想定して検査治療になります。

特に診断治療を急ぐ病態は、やはり患者さんの重症感が強い場合です。重症な発熱を伴う病気としては、血液の病気、ウイルス感染による急性肝炎、髄膜炎などがあります。

患者さんは発熱があると、ほぼ数日、市販の風邪薬を飲んでお見えになります。

一般の風邪の症状は、「微熱、咳、鼻水と喉の痛み」です。3日から4日過ぎても治らない咳は気管支炎を、喉の痛みと高い熱は扁桃腺炎を疑ってください。咳などの呼吸器症状がなく微熱が持続する場合には感染症より膠原病などを考えて医療機関を受診ください。

長期予報によると今年も暑い夏になるようですね。節電も大事ですが、夏バテ、熱中症に気を付けて8月を迎えてください。



伊藤外科 HP <http://www11.ocn.ne.jp/~itoh-hp>

(バックナンバーは HP にて公開中です)

8月号はお休みさせていただきます。
次号は9月発行です。

三弓先生の本棚 24

今回の一冊

わが母の記／しろばんば

井上 靖 著

先日、映画『わが母の記』を観に行った。昭和の文豪・井上靖氏原作の映画である。原作がある映画を観るとき、必ずといっていいほど原作を読む。だが、「映画を観るのが先か、原作を読むのが先か」が問題だ。そのどちらにするかは、作品によって、己の勘所で順番を決める。今回は、原作を先に読んだ。

『わが母の記』は自伝的小説の三部作で構成されている。年老いて少しずつ記憶が毀れていく老耄（ろうもう）の母の姿が、息子であり作家である「私」の目線から静かに描かれている。

映画と原作、どちらが強く印象に残ったかと問われれば、現時点では正直、映画かな。井上氏は幼少期、やや複雑な育ちをしている。5～13歳の多感な時期、両親のもとを離れ、曾祖父の妾であったおばあさんと、一族の里である湯ヶ島で育った。原作にもこのことは出てくるが、ただ、その事実が認められているだけである。だが、映画のほうでは、主人公の作家はこの事をいままって「母に捨てられた記憶」として留めている、という屈折が描かれる。母は記憶を頭から消していくと同時に、長男である作家のこともわからなくなっていくわけだが、最後に残した記憶は……（観てない方のために、ここはナイショ。樹木希林さんが好演!!）。感情の彩りの味付けが濃い分、観たばかりの今は映画のほうが脳裏に焼き付きついているのだろう。さらに映像に映し出される伊豆の山里の風景が実に美しい。作家の自宅や軽井沢の別荘は、いかにも「昭和の文豪」の空間と密度を醸し出しているが、なんと、井上靖氏ご自身の自宅と別荘が撮影に使われたのだとか（自宅は撮影後、取り壊され、一部が記念館へと移築されたそうだ）。

『わが母の記』を読んで観た後、もう一作、『しろばんば』を読んだ。

こちらは井上氏自身の幼少期を題材にした小説。舞台は大正時代。天城山麓の山村で5歳のときから「おぬい婆さん」とふたり土蔵で暮らす「洪作少年」。洪作の両親と弟妹は離れた町に暮らしている。土蔵の側には洪作の祖父母が暮らす家がある。おぬい婆さんは洪作の実の祖母ではない。曾祖母のお妾さんである。洪作を溺愛するおぬい婆さん。また、両親のもとに帰ることよりおぬい婆さんとの土蔵での暮らしを選んだ洪作。この小説は、少年から青年の入り口へと成長していく洪作の目で捉えられた、山村の暮らしや、子ども同士の、大人たちの人間模様が描かれている。

読後、「ああ、昔の（昭和の）小説はこうだったなあ」としみじみ。大きな事件は取り立てておきない。じつに静かな小説だが、とても骨太である。新潮文庫巻末の解説者・臼井吉見氏が「日本社会特有の人物が、これほど見事に描かれた例を僕はほかに知らない」と書いているが、たぶん、私がこの小説から受けた感銘もこれに近いのだと思う。三週間近くかけてゆっくりと、夜、布団の中で読んだが、「最後のページを閉じる寂しさ」を久しぶりに味わった。

（一弓）